

2022年10月2日 礼拝説教要旨

詩編講解説教122「主の家に行こう！」

詩編122：1～9、ルカ19：41～44

第122編は1節に「主の家」とあり、また最後9節にも「主の家」とあります。最初と最後に同じ言葉があることから「主の家」という言葉が122編のキーワードになっていることが分かります。「主の家」は、ここではエルサレムの神殿と素直に捉えてよいでしょう。このエルサレムの神殿、またそこで行われる礼拝こそ巡礼の旅の目的です。そして同時に捕囚を経験したイスラエルの人々にとって「主の家」は、捕囚から解放され帰還する場所であり、散らされた神の民が再び集められる、そういう場所としてこの「主の家」を捉えておりました。ですから特別な思いを持って歌われた歌だと考えられます。「主の家」への強い憧れがここには表現されています。

今日のわたしたちにとって「主の家」は何より教会、あるいはそこで行われる日曜日の礼拝と理解することができます。礼拝から礼拝へと向かう一週間の生活が巡礼の旅であるとするならば、ここには一週間の旅路を終えて礼拝の場所に足を踏み入れた喜びが語られている。またもう少し大きく考えますと、この「主の家」は神の国であり、わたしたちの人生の最終目的地と捉えることもできるでしょう。人生の最後にわたしたちが入る場所、黙示録で言うところの「新しいエルサレム」(ヨハネ黙示録21：2)に到着した喜びが語られている。そう捉えますとこの122編は信仰者の人生の旅路をとっても具体的に分かりやすく表している歌だと思います。

この第122編は、三つの部分からなっていると考えられます。一つは、巡礼者が都に到着した喜び(1～2節)。二つ目は、その都がどういふ場所であるか。巡礼者が都に足を踏み入れた時に目の当たりにしたであろう情景、様子がそこに記されています(3～5節)。最後三つ目は、その都で巡礼者たちが行ったこと、それは礼拝であります、その礼拝の中心である「平和」がここに語られています(6～9節)。到着から、都の情景、そして平和を祈り求める礼拝とエルサレムに到着した巡礼者の喜びがここに語られています。それはわたしたちの礼拝の喜びや人生の完成の喜びと重ね合わせることもできるでしょう。

到着の喜び、日曜日の礼拝に足を踏み入れること、それが何より喜びであることはここにおいてにされるお一人お一人が実感しておられることではないでしょうか。コロナ禍でなかなか礼拝に集うことが難しくなりました。病気で入院して礼拝に来ることができない。そういう友が何人もおられます。礼拝が習慣化している者にとってそれは非常に苦しいことです。生活の一部になっているからです。でもそういう束縛を解かれ、礼拝に再び足を踏み入れることができるならば、それは喜びも一入ではないでしょうか。冒頭の「主の家に行こう」をある人は「いよいよヤハウエの家に入ろうとしている」と訳します。巡礼の旅人が長い旅を終えていよいよエルサレムの神殿に入ろうとしている。そういう到着の喜びがここにあるのです。

日曜日の礼拝というのは、本来そういう喜びで満ちているはずですが。皆さんはやっとの思いでここにたどり着きました。「あなたの城門の中にわたしたちの足は立っている」(2節)それがいかに幸いなことであるか。一週間の生活も嵐のような日々もあります。ずぶ濡れになりながら、やっとの思いでたどり着く。だから「よく来たね」と肩を叩いて喜ぶのです。お互いの無事を喜び、再会を喜び合いながら神さまを礼拝するのです。

そしてそこで交わされるのは何より平和の挨拶です。「わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」（8節）「平和があるように」（シャローム）これはユダヤ人が普段から使う挨拶の言葉でもあります。「お元気ですか」そういう意味です。でもその根底には、神さまとの和解があります。なぜ平安でいられるのか。それは神さまに罪を赦されているからです。わたしたちは責められるためにここに集められているのではありません。赦されているからこそ安心してここに集まるのです。

2節には「城門」とあります。エルサレムは城壁に囲まれていますから、都に入るためには城門をくぐり抜けなければなりません。これは日本ならそれこそ「敷居」と言ってもいい。「二度と敷居をまたがせない」と言います。わたしたちは罪ゆえに本当ならば敷居をまたがせてもらえない者です。ここに入って来てはいけない。でも入れる、主の家の中に立てるのです。どうしてですか。イエス・キリストが罪を贖ってくださったからです。わたしたちをここに招き入れるために、ご自身が十字架で死んでくださった。「神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちに委ねられた」（Ⅱコリント5：19）とあります。キリストがご自身の命と引き換えに神さまとの和解、平和を打ち立ててくださいました。

今日はルカ福音書の御言葉を読みました。主イエスはエルサレムに入られる時に「もしこの日にお前も平和の道をわきまえていたなら。しかし今は、それがお前には見えない」（ルカ19：42）と涙を流されました。主が嘆かれるようにわたしたちは平和の道をわきまえていなかった。神さまとの関係を壊したのです。だから主が言われるように敵に攻め込まれ、滅ぼされる。そういう定めの中にありました。けれども神さまはこの定めを変えておしまいになります。わたしたちが滅ぼされるのではなく、イエス・キリストが裁かれ、都の外で十字架で捨てられた。だからわたしたちがここに立てる。神の都の中に、主の家の中に。日曜日の礼拝もそういう喜びを噛み締めながら共に集いましょう。